

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 7

年間優勝の軌跡 (奇跡)

鹿島釣狂



釣遊会第7回大会

☆開催日 平成12年11月19日

☆開催場所 東静内港～浦河港

☆入釣場所 春立4区

☆潮 満潮 18:26 129cm

干潮 02:30 40cm

満潮 10:28 115cm

☆釣果 カジカ 427mm 以下8

アブラコ 327mm 1

ハゴトコ

重量 4940g

☆成績 合計 1248点

順位 1位

持ち点 1点

累計点 14点

年間総合優勝

ゴングが鳴っている

最終ラウンドまで纏れ込んだ勝負の行方がこの回で決する。挑戦者には今までの回で積み重ねてきたボディブローがかなり効いているはずだ。さらに、前ラウンドで放ったクリーンヒットが相手にダメージを与え、かなりのポイントを稼いだ。しかし、彼はハードパンチャーだ。苦し紛れで闇雲に打つカウンターパンチがある。しかも私はこの回までの飛ばし過ぎで疲れがピークに達している。また、この回を制すればチャンピオンベルトを手にすることができるというプレッシャーで自分自身が自滅する事も考えられる。ゴングがしきりに鳴っている。

イメージトレーニング

私は今回の大会に向け、様々な状況を想定してのイメージトレーニングを積み重ねた。瞼を閉じると鮮明に浮かび上がり、どちらが現実だったのか錯覚してしまうほどである。実釣で釣り歩くことが出来ない分、空想の世界での練習を積み重ねたのである。入釣場所や天候に合わせた仕掛けづくり、エサ、移動方法やその釣果など、ここでは紹介することができないが簡単な原稿も書いてみた。その稿の最後にはアブラコ『ウンcm』、カジカ『ウンcm』とあり、もちろんこの『ウン』は50よりは大きい数字となっている。

シドニーオリンピックで優勝した女子マラソンの高橋尚子も、あのアップダウンの42.195kmの難コースをイメージ上で何度も走ったことだろう。そして尚子の頭にはオリ

ピック前に、何度も優勝のゴールテープを切っている自分の姿がイメージ出来ていたはずだ。

柔道の田村良子だって、「最高で金。最低でも金」とオリンピックの前に何度も孤高のイメージを膨らましたのだろう。勝ち抜くたびに相手選手を想定し、様々な技を繰り出したのであろう。

400m個人メドレーで銀で終わり「めっちゃ、悔しい」の田島寧子だって金をイメージしていたからこそ「金がよかった〜〜〜」となるのである。「つまりですね〜。いわゆるですね〜」を連発している欲しがり病の長嶋茂雄監督だってジャイアンツの優勝をイメージし、落合に始まり、清原、石井、工藤を補強し、ペナントレースを戦っているのだ。今年は何でしたっけ？

体調自主管理

仕掛けは今回、2週間前に準備完了。本誌「ぼくが釣るコツ教えます！」の永井良春氏のアイデアを拝借し、ルミコバージョンを試作してみた。

大会前日、職場対抗のスポーツレクリエーションがあり、その後、慰労を兼ねた懇親会があった。私は釣り大会での体調とエサの買い出しや仕込み事もあり酒を自粛した。酒席では必ず飲むはずの私がウーロン茶を吸っているのを不思議に思った同僚が体調でも悪いのかと尋ねてきた。精神的に少し疲れが溜まっているため気晴らしに海に釣りに出掛けることを告げる。彼も釣りをやるらしくおおいに話が盛り上がり、釣果の大カジカは彼に賞味してもらうことを約束した。

エサのイカゴロは酒を自粛してまで購入した前日から、地下でじっくり自然解凍したため程よい状態になっていた。カツオは溶けた状態だと切り分けずらく、匂いもひどいためやはり当日購入した。そして、カチンコチンのカツオを寒風吹き晒す屋外で切り分けた。家の中に持ち込んでストーブの上でシバレを溶かそうとも考えたが、家族にあの悪臭を我慢させるのは忍びない。結局、カツオを詰めたバツカンバスをバスのトランクには積まず、温かい車内に持ち込むことを余儀なくされる。

馬太洒落に込められた温かい酒已慮

今回の入釣場所は春立と決めている。春立は、プライベートで初めて太平洋の釣りをした記念すべき場所である。しかもその時は12月30日という真冬にもかかわらず、アブラコ53.2cmを釣り上げた記録と記憶に残る場所でもある。

天気予報は時化を予想。上空には真冬並の強い寒気が入り、土曜から日曜にかけて風雪が強まり波は4メートル後5メートルと告げている。出発時刻になり、札幌から到着したバスの車体には雪が氷となってこびりついており、路面も凍てつきテカテカ状態である。

防寒具に身を固めた会員たちは早速バスの中に乗り込んだが、暖房の温かさに加えて酒の勢いもあり、早速仲間との前哨戦が始まる。バスの中で大前事務局長から6回大会まで

の成績表が配られた。阿部氏がそれを見ながら年間優勝が懸かっているメンバーに声をかけていく。

「岡君、オカ釣りの方が戦い慣れしているんでないの」

「このアラシでは嵐君のものだな」

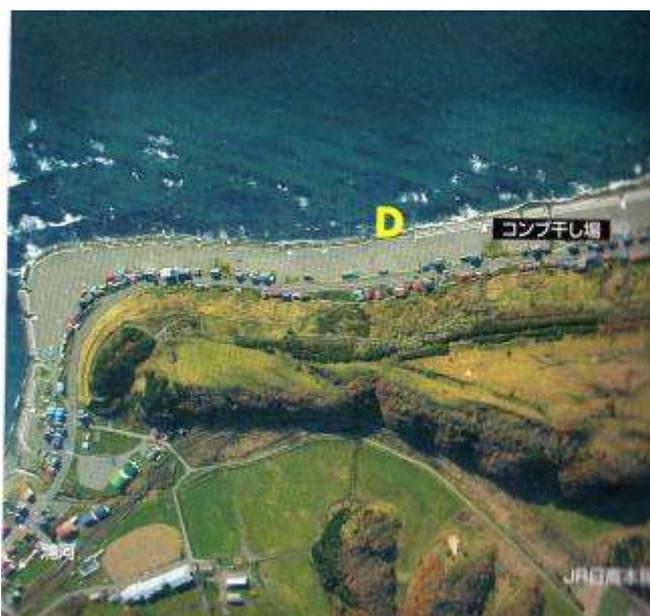
「前野君、いつものように俺も一緒に隣に並んで釣っていいかい？」

『釣れ釣れなるままに』のタイトルは惨敗釣行記となるな」

駄洒落を織り交ぜながらも緊張感を和らげる大先輩としての温かい配慮に感謝する。私も含めてこの4人が3点差で争っているものだからいやがおうでもプレッシャーが掛かる。

私は「当面の敵は己にあり」「自己との戦い、結果は自ずとついてくる」を決め込もうとするがやはり情報は少しでも知り得たい。「前野さんが勧めてくれた場所には絶対行かない」と真実味を帯びたジョークを飛ばしながら、当面のライバル前野氏の教えを請う。また、以前春立と一緒に並んで釣りをした西川氏から詳細な情報を得る。さらに、昨年7回大会で春立に入って優勝し、大逆転で年間優勝をも飾った吉井氏にも教えを願う。

剣の極意



春立4区では天気予報通り強い風が吹き付け潮も高く畝っているが、沖で大きく盛り上がった波が張り出した岩盤に砕け散り、岸边にはちょうどよいカジカ波が寄せて来ている。辺りには人っ子一人いない。当初から入釣予定の所に道具を置き、春立交番前方向に様子を探りに行くと、10人ほどが岩盤の切れ目からチョロ川にかけての砂浜に竿を出していた。それぞれがテトラの切れ目に入っており、私が入り込むようなスペースはない。しかも、交番前は岸近くまでハタハタの綱の梵天（ボンデ

ン）が浮いておりその手前に打ち込んでいるものらしい。夕方から竿を出しているという釣り人に尋ねるが状況はあまり芳しくないらしい。さらにしつこくあれこれと聞くものだからせつかく確保した狭い釣り場に割り込まれるとでも思ったのか、終いには聞こえない素振りをされてしまった。己の人間としての未熟さと本日の大会に向ける焦りが相手に不快感を与えてしまったのだろう。

荷物を置いた所に戻り、一番波が死んでプール状になっている所で竿を出す。エサをつ

けようとカツオを取り出すがいまだ溶けきっていない。気温は氷点下であり、溶けかかったカツオが吹きっ曝しの寒風のために表面がシバレ始める。エサバケツの中の方は発酵しているのか、エサが溶けているのでそれを使う。

30m程前の盤の先に乗るにはまだ潮が高いこともあり、立ち込みはせず、岸に芋立てを置き、浅い潮を漕いで一段深くなった手前まで出て、仕掛けをドボンと投げ入れる。この最初の一投では期待と不安で交錯した緊張感があるものだが、今日はなぜだか平常心である。ひどい嵐の中で釣り場を確保できたという安堵感から来るものだろうか。今更じたばたしても始まらないという達観した心境によるものだろうか。妙に心のざわめきがない。私に剣の心得はないが、極意である「平常心」での釣りが出来そうである。

平常心に忘れてくれた獲物

3本とも出し終えたところでアタリがある。25cm程のカジカが釣れ、魚を針から外そうとしている時に真ん中の竿に大きなアタリがある。タイミングを外したかなと思いながらも竿を煽る。カジカの大物だ！胸鰭をいっぱい広げているのであろうか、ジワーツと寄ってくる。しかし、駆け上がりの所まで寄せた後、リールが巻けなくなった。道糸を緩めないように岩盤の先まで出て、方向を変えて竿を煽ると、ゴボッと45cm弱のカジカが浮き上がった。そのままの状態では深さが40cm程の潮の上を波打ち際まで30mほどの距離を滑らせるようにして取り込んだ。2時頃までにカジカが4本そろってしまった。後は嫁であるが、簡単に釣れるはずのハゴトコはまだである。

そこへアブラコ独特のアタリがある。根がかりがひどくて仕掛けをいくつか消耗したが、昆布根が見え隠れしている所に打ち込んでいた竿だ。大きく煽るがやはり根がかりしている。しかし、ゴンゴンと芋先を通してアブラコの大型物がついていることがわかる。先程のカジカと同じように岩盤の前まで出て方向を変えながら竿を煽るが、今回はがっちり岩に引っ掛かったようだ。何度も竿を煽っているうちに道糸が岩で擦り切れたのだろう、フワッと軽くなった。ウーム無念。

嫁を取る場所はないかと空身で春立漁港の方向に様子を伺いに行く。大きな波が岸まで打ち寄せている中で、多少波が死んでいるところをいくつか確認して釣り場に戻る。東の空がわずかに明るくなり潮も少し引いた。盤の先に乗れるようになって来たので春立漁港方向に少し移動し、盤の上から所々に見える黒々とした昆布根の際に場所を変えて3本とも打ち込んだ。どの竿もチョコチョコとしたアタリを告げ出し、20cm程のハゴトコがパタパタッと来た。それに交じって35cm程のアブラコも来てくれた。嫁もそろって1000点は優に越え、この激しい嵐では上位入賞は間違いないであろう。しかし、年間優勝がかかっていることもあり、さらに打ち続けると、30cm弱のカジカに交じって入れ替えのできる40cm程のカジカも来た。

余裕の移動

足元に打ち寄せる波も徐々に高くなり、満潮に向かってさらに潮も込んでくるのが予想され、立ち込んでの釣りができなくなる。6時、この場所は無理と判断して移動することにし元静内方向に足を向ける。春立漁港左側の磯に釣り人が3人ほど見え、一番胸壁に近い所にはアサリ浜に入ったはずの嵐氏の防寒具に似た人物がいるが彼だろうか。

春立漁港内は釣り人で満杯である。この付近の磯に下り立った釣り人が、この嵐を避けて港内に集まったのだろうか、私に竿を出せるようなスペースはない。春立入口も釣り人が満杯であり、やはり入り込めるところはない。しかも、沖から打ち寄せ、荒れ狂う波で潮が黒々と濁っている。防潮堤の上からしばらく様子を伺っていると釣り具を片付けている御仁がいたので、まずはそこに入れさせていただく。手前の溝の奥にある横岩がいったん途切れており2番目の溝に打てる場所だ。しかし、正面から打つと右からの強風で道糸が左に流され岩にかかる。右側に少しずれて打つ。(図参照)魚を取り込むときは道糸が真っすぐになり、やはり岩にかかるため移動しながら取り込むことになる。小さなハゴトコが何匹か来たが、アブラコやカジカはいないらしい。この濁りでは無理のないところか？先客の話では暗いうちにカジカがボツラボツラという状態だったとのことである。

どつきり

9時、少し早い片付けにすることにする。風が強く寒さもあり元静内バス停まで歩き避難する。結局歩いた距離は春立駅前、春立4区、春立漁港、春立入り口、元静内とバス停4区間である。様子を伺うため何度か歩いたのを含めるとかなりの距離である。

バス停では先に上がった金漁会や野幌釣り会の面々がやはりバス待ちをしていた。そこで後藤氏や寺氏から楽しい会話を聞かせていただいた。ある大会では1位、2位の成廣を取ったのだが、土管の中で雨を凄いでいたため、バスに乗れず失格となり年間優勝をも逃したとのことである。私も、年間優勝のかかるこのビッグチャンスに同じ過ちをおかしたくないので、早めの10時30分ごろバス停から外に出て待つ。45分ごろ金漁会のバスが来たが、区間は同じなので我が会の釣りバスも間もなく来るだろう。しかし、リュックを背負うのに手間取っていた金漁会の御仁がいたので手伝っていると、そのバスを追い抜いて行った釣りバスがある。色が似ていたのでドキリとする。腕に腕章を巻いてはいたが手伝っている間に金漁会の者として取り扱ったのではないか。一瞬不安がよぎる。しかし、間もなく、前面に黄色い旗をつけて見覚えのあるバスがやって来た。安堵の胸を撫で下ろす。

気になる他人の釣果

バスに乗り込んだのは、私が最後であった。嵐氏が先に乗っているのをみるとやはり春立漁港左にいたのは彼である。機先を制して岡氏や嵐氏に早速釣果を聞いてみる。前野氏の顔を見る。どの顔も満更ではない様子である。私にも聞かれたのでカジカ40cm程の物4本、嫁はアブラコ30cmと正直に答える。

岡氏は井寒台に入釣する。しかし、井寒台はこの嵐のため入釣者で満杯の状況であった。しかも、今回の大会は彼の師匠である佐々木氏（釣遊会のメンバーの誰もが師匠としているのであるが・・・）。もちろん私にとってもかけがえのない師匠であり、彼から指導頂いた釣りの極意は私の釣訓となっている）が不参加であった。が、しかしである。佐々木氏は今回の大会でアドバイスを送っていた岡氏が気に入り、2時間程の時間ではあるが、この遠い海原にやって来たとのことである。本当に頭が下がります。

前野氏は予定通り浜荻伏川で嫁のアカハラを取り移動する。しかし、移動した場所は釣り人で満杯であり、しかも彼が目指したトッテオキの場所には初心者がどっかと腰を据えており、狙い場所も外していたらしい。前野氏の言葉からは歯軋りしてその初心者の動向を伺っていた様子が手に取るようにわかる。

嵐氏は元静内川の右の盤に向かったとのことであるがあまり多くは語らない。私が元静内バス停で元静内川右に入った金漁会の御仁から集めた情報では、カジカの大物もっていたことは確かである。その後、彼が得意とする東静内方向に移動して行ったものか？そして、最後に移動して行った春立漁港左での釣果が気になるところである。

優勝そして年間優勝も

優勝	鹿島釣狂	1 2 4 8	(カジ 425 mm+アブ 327 mm+4940g)	春立
準優勝	堀内正博	1 1 2 5	(カジ 440 mm+ハゴ 270 mm+4150g)	三石
3位	嵐 光博	1 0 2 3	(カジ 430 mm+ハゴ 240 mm+3530g)	元静内
4位	前野達志	1 0 2 2	(カジ 367 mm+アカ 346 mm+3090g)	荻伏
5位	岡 英成	9 7 6	(カジ 398 mm+ハゴ 255 mm+3290g)	井寒台
6位	荻野一利	8 2 2	(カジ 356 mm+アブ 318 mm+1480g)	三石
身長	堀内正博	4 4 . 0 cm	カジカ	

審査の結果、優勝は1248（カジカ 425 mm+アブラコ 327 mm+4940g）点を取った私であった。準優勝は1125（カジカ 440 mm+ハゴトコ 270 mm+4150g）点の堀内氏。3位は1023（カジカ 430 mm+ハゴトコ 240 mm+3530g）点の嵐氏であった。ちなみに前野氏は4位。岡氏が5位であった。

その結果、年間総合優勝も私の元に転がり込んで来たのである。私がこけていれば嵐氏が逆転優勝するなど当然順位は大きく変わっていたのである。

振り返れば、年度当初は、ただ釣りができることが楽しくて、うれしくて、心をときめかせながら大会に参加した。それが、第6回大会ごろから年間優勝を狙える位置にいたことがわかると、さらに、違った意味でその胸をときめかせることになった。嵐氏の言葉を借りれば

「追う者より追われる者の方が辛い。追っている時は一発狙いで気が楽である。守ろうとするとそれがプレッシャーになる。」

もちろん、私などはその立場にはなることなどなく門外漢ではあったが、今は、何度も年間優勝を争ってきた嵐氏の言葉がなんとなく理解することができる。

昼飯時に祝杯をあげ、バスに戻ってから残っていたワンカップを2本も飲んだため、途中のトイレタイムにも気付かず、目覚めたときは岩見沢の人となっていた。自宅に戻ると、女房も娘も出掛けていて自慢話を吹聴することができない。しかも、岩見沢は昨日からの大雪で、自宅玄関前も公宅前も除雪する羽目になった。

やっと帰って来た女房が恐る恐る私の顔をのぞき込む。普段は気難しい私の顔に喜びを隠そうとしても隠し切れない目尻や口元を見て、「優勝、おめでとうございます」と来る。「ウム」と口元がさらに緩む。娘も帰って来てやはり私の顔をのぞき込み「父さん、すごいね。おめでとう」と来る。私のにやけた顔がさらにデレデレと締まらないものとなる。出発前の私にはかなりのプレッシャーがかかっており、それを敏感に感じ取ってくれていた女房や娘に感謝する。

次の日の職場でも同僚が次から次へと尋ねてくれる。同僚との酒席で深酒をし、「北海道のつり」の投稿記事とともに今年度の成績などを自慢気に吹聴したものらしい。もちろん戦利品のカジカは職場の同僚に賞味していただくことになる。

徒然なるままに

明けて21世紀初めての正月、新年の釣遊会総会が開催された。そこで、会長から年間優勝の賞状と優勝旗を受け取った。併せて年間大物賞カレイ部門のトロフィーをいただくことができた。

「つれづれなるままに、日ぐらしすずりに向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつづれば、あやうこそものぐるほしけれ。」

思えば、武士階級が世の実権を握っていた時代に現実の世を捨てた兼好法師のように「徒然なるままに」の大会参加であった。しかし、2000年度は終盤になるに連れて「あやうほどもものぐるおしけれ」の心境となった。本会の年配者で組織されている「釣老会」のメンバーのような達観した心境になるにはまだまだ歳月が必要である。

2001年度は、のんびりと自分の穴場と言えるものを探して釣り歩きたいと考えている。大会参加で歩いているうちに是非とも竿をおろしてみたい磯もいくつかできた。

大会の度に目が血走っているようでは魚のほうから己を敬遠することになるだろう。「何だこんなチビか」なんて魚を虐待しているようでは後で大きなしっぺ返しを食らうのが落ちだ。やっとの思いで確保した釣り場に「そこ避けここ避け己等（おいら）が通る」と言わんばかりに略奪するのいただけないが、我が物顔で釣り場を独占するのめどうかと思う。

魚を愛し、自然を愛し、人をも愛する気持ちで大海原に立つことが、魚のほうから己を受け入れてくれることになるのであろう。「釣りが出来るだけで幸せ」と感じているときに

こそ思いがけない釣果を施してくれるものである。

「徒然なるままに」
「連れ連れなるままに」
「釣れ釣れなるままに」

もし今回の大会で私が優勝出来なければ、年間優勝の行方は
2位 嵐 で (2、4、4、1、7) 合計 18 点
5位 鹿島で (5、1、2、7、3) 合計 18 点
つまり 822 点の荻野氏より上位であれば嵐氏と並らんだことになる。

2000年大会結果

①蒲原平盤 993 8位
②軽臼平盤 958 8位
③東歌別 1110 3位
④岬トンネル 991 7位
⑤古丹別 1078 2位
⑥東歌別 1304 1位
⑦春立 1248 1位
7回平均 $7682 \div 7 = 1097$
5回平均 $5733 \div 5 = 1147$

<入って見たい釣り場>

・今年度の大会範囲であれば

- ① ☆大平川河口平盤 栄浜平盤 穴潤平盤左 豊浜大岩場左
 - ② ☆赤灯台 軍艦岩 弁慶岬 軽臼平盤左
 - ③ ☆歌露 坂岸 エリモ第三 留吉の沢 旗場の先
 - ④ ☆オニ岩・第二オニ岩 夫婦岩・長磯岩 ルベシベツ サルル 赤岩
 - ⑤ ☆幌向川～三豊 小平蕊川 苔前三角
 - ⑥ ☆上・中近浦 エリモ港右 月寒川
 - ⑦ ☆三石漁港左～チャップ川～三石川 東井寒台 梟舞崖下 浜荻伏
- その後入ったところ (平成19年8月)

◇そんなプレッシャーを感じるのも快い。10年後にもう一度だけ年間優勝を狙って見ようと思う。そのときは60歳である。果たしてそんな体力や精神力が残っているだろうか。そうありがたい。先輩は今でもエネルギーに満ちあふれている。

◇川釣りもしてみたい。ヤマメは最高。フライも本格的にしてみたい。あの美しい魚体
それに比べて カジカやアブラコはグロテスク

◇そして、しばらく投稿はやめよう。自分の力が潜まったとき。満を持して